平成26年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 キダイ

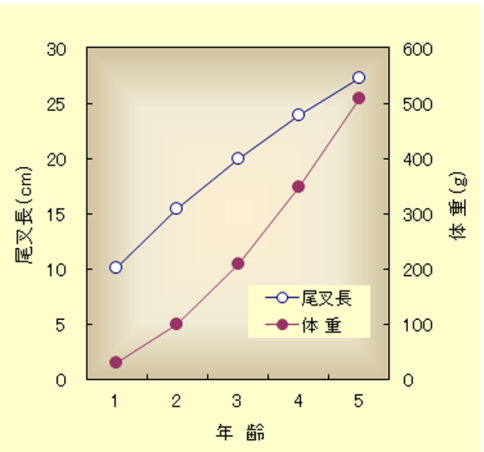
学名　*Dentex hypselosomus*

系群名　日本海・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所

生物学的特性

寿命:　8歳
成熟開始年齢:　2歳
産卵期・産卵場:　春季と秋季の年2回、分布域内（五島西沖～済州島、沖縄北西の大陸棚縁辺、台湾北東の大陸棚縁辺、浙江、福建近海）
索餌期・索餌場:　夏季は浅みに、冬季は深みにという深浅移動を行い、大規模な回遊はない
食性:　主に甲殻類
捕食者:　不明

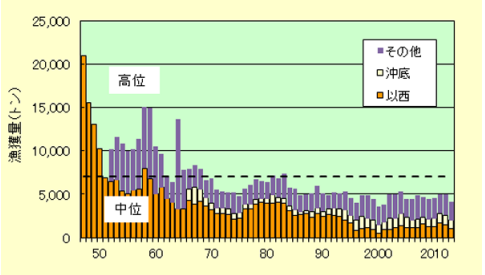


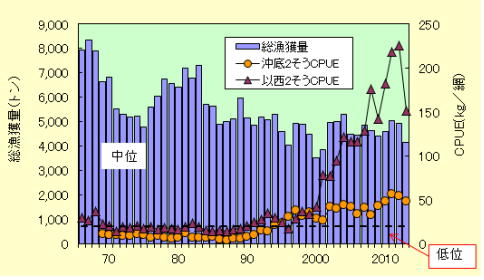
漁業の特徴

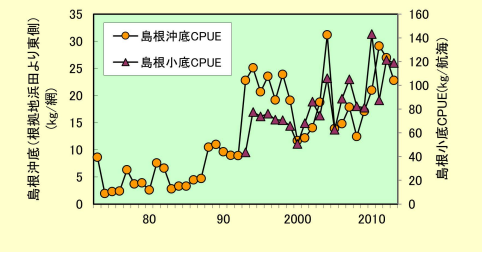
漁業の主体は沖合底びき網漁業、以西底びき網漁業、小型底びき網、延縄、釣りである。県別では島根・山口・長崎の漁獲量が多い。かつては日本海西部～東シナ海南部に広く漁場が形成されていたが、現在は日本海西部～九州西岸が中心である。東シナ海では現在も日中暫定措置水域を避けるように漁場が変化している。中国・韓国漁船によっても漁獲されているとみられるが、漁獲量は不明である。

漁獲の動向

戦後の沖合漁業の再開後、1947年に以西底びき網漁業だけで漁獲量は20,000トンを超えたが、その後急速に減少した。近年では、2そうびき沖合底びき網漁業および2そうびき以西底びき網漁業による漁獲量はそれぞれ1,000トン前後で安定している。その他の漁業種類による漁獲量は2,000トン前後で推移しており、全体を合わせた漁獲量は2013年には4,000トンであった。





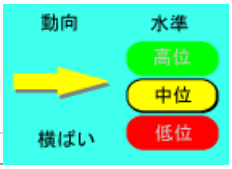


資源評価法

1980年以降も日本漁船が利用する漁場は縮小しているため、現在の漁場となっている海域のCPUEの変動に基づきABCを計算した。資源水準については、本系群の分布域を広く漁場としていた1947年以降の漁獲量変動を基に、日本漁船が現在利用している漁場に分布するキダイ資源を対象に判断した。なお、中国・韓国の漁獲量は不明のため考慮しなかった。

資源状態

現在では日本漁船は、かつてキダイの密度が高かった北緯31度以南の東シナ海漁場をほとんど利用していない。現在の漁場における資源量指標値はいずれも1990年代以降は増加傾向であり、特に、日本海西部を漁場に含む沖底2そう、島根沖底2そう、島根小底の1994年以降のCPUEは、それ以前と比較し高い水準を維持している。なお、以西2そうのCPUEは1990年代半ばでの増加が顕著でなく、他の底びき網漁業CPUEと変動が異なる。



管理方策

1947年以降の漁獲量と日本漁船が現在利用している漁場における資源量指標値から日本漁船の漁獲対象資源の水準は中位であり、近年の動向は横ばいであった。現在の限られた漁場内での漁獲を考慮した場合、漁場内での分布量動向に従って漁獲することが妥当であると考えられる。このことから、現在の漁場内の以西2そう、沖底2そう、島根小底CPUEの相乗平均を資源量指標値として用いて算定した係数を、2013年の漁獲量にかけてABCを算定した。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	4,000トン	1.0･C2013･0.97	－	－
ABCtarget	3,200トン	0.8･1.0･C2013･0.97	－	－

- 資源量指標値として現在の漁場内の以西2そう、沖底2そう、島根小底CPUEの相乗平均を用いた
- ABC算定規則 2－1）によって、ABCはABClimit＝δ_1･Ct･γ_1、ABCtarget＝ABClimit･αで計算した
- γ_1は、γ_1＝1＋k(b/I)で計算をし、kは係数（標準値の1.0）、bは資源量指標値の傾き、Iは平均値（直近3年間）である
- 現在、日本漁船は東シナ海のかつての主分布域を漁場として利用していないことから、資源水準によって決まる係数δ_1には1.0を採用

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は横ばい
- 1947年の漁獲量と比較すると、2013年の漁獲量（4,000トン）は少ない
- 1990年代以降では現在の漁場内での資源量指標値は増加傾向

管理方策のまとめ

- 利用している漁場が限られているため、現在の漁場内での分布量動向に従って漁獲することが妥当である
- 東シナ海における資源管理には関係国間の協力が必要

執筆者：福若雅章･依田真里

資源評価は毎年更新されます。